



○音楽と男女兩性

上原 六四郎

音楽と男女兩性とは如何なる關係を有するかといふに、女子は男子に比較するときは、情に纏まり情に傾き易きと共に、割合に忍耐力が強い。或學者は女子は情と愛との塊であると言うて居るが、實際斯く評せらるゝ程情に厚いもので、且つ女性に男性に比較すると、身體を飾るといふ念慮も餘程強い。音楽と男女兩性とを較査すれば、音楽は特に女性に適當して居るやうに思はれる。其爲であらう。西洋でも日本でも婦人の方が一般に最も音楽を嗜むやうだ。先づ何人でも深窓に於て琴を彈するのを聴くときは、其人は如何にも美しい、又如何にも奥ゆかしい人の様に感ぜられ、直接に其人を見ずとも其美情を察することが出来る。音楽

は實に此の如く女性に適したものである。然らば女性には何か注意すべき弱點がないかといふに、夫れは決して無い譯ではない。抑も古來女性の音樂家には何故か名人が出ない、就中作曲家に至りては全世界を通じて全く絶無である。外國の歴史などを調べて見ても、女流作曲家は一人もない。日本でも之と同様で、随分藝に精しい女子はあるけれど、作曲に巧みなる者は曾て聞かぬのだ。また技藝として音楽を奏する人にも男子が多數を占め、例へばピアノにせよ、ヴァイオリンにせよ、又我國の琴三味線にもせよ、平均すると男性の彈奏者が多いやうだ。併し奏樂上女性の特長と認むべく、男子の企て及ばざる所の者は、音聲である。蓋し音樂には低聲よりも高聲の方がよく冴える。時としては雄壯快活にも聞こえるし、又時としては非常に悲しく哀れにも聞こえる。然るに斯神の高聲は男子には發し難い。之に反し女子は其特性として高聲を發するに適する。従つて歌ふ事に就

ては、世人は多く女性の方に同情を表するやうだ。尤も低聲でも美聲の人もないではないけれど、人を感動せしむる力は比較的、高聲の方にあると思ふ。又音楽は現今器樂聲樂との二種に大別せられてあるが、其中最も妙味の存するのは聲樂で、洋樂に於ても特に珍重せらるゝのは婦人の音聲である。専門家としても若くは素人としても、女性が音楽社會に持離さるゝのは無理はない。

叙上の如き事由あれば、女性で音楽を學ばんとする者は器樂よりも、聲樂を修むる方が得策である。之を以て專業として社會に立つと、將娛樂の具に供するとを問はず、女子は其特長たる音聲を練磨して、樂界の霸權を握るに若くはないと思ふ。又女子は兎角物事を氣にする性癖あり、或は家事を整理する事に就き、或は親戚知人との交際に就き殊に兒童の養育に就きて細密に氣の付くだけそれだけ心配が多いものなれば、此重荷を成るべく軽減せしむる方法を授けるとが必要であるが、適度

の音楽練習は、女性に對して一種の攝生法たる事を得べく、一方に於ては精神を慰め、又一方に於ては身體の運動に資するといふ兩益がある。尙音樂の修練上大に反省を促さんとするは深入りして研究する事である。音楽は深く入りて研究しなれば妙味を解することが出來ぬ。音楽は凝ると弊害が生ずるゆゑ不可ぬといふ人あれど、予は此説に服し難い。何となれば音楽は深く進んで研修せざれば、真正なる趣味は湧いて來らず、而して真正なる趣味を解せざれば、自然之と隔絶する事となるべきを以て、十分趣味を解し得るまでは深く入つて討究する必要があるからだ、予は尺八を好んで吹いて居るが、之を吹奏するには、力を下腹に満たして肺の呼吸を十分に作るから、坐ながらにして非常な運動になる。此等も衛生上有益なるものであらう。然るに西洋の婦人は知らぬが、我國の婦人は練習の時でも、演奏會の時でも、何分高聲を發することを遠慮する風があつて困るが、

併し之は畢竟一種の習慣なれば矯正せられぬ事は
ない。樂界の風潮が其方面に向へば、皆競うて高
聲を發するやうになるに相違ない。之を要するに、
音樂の中でも、女性の學ぶに適當であり、且効益
多しと思はるるは、器樂よりも聲樂に屬するもの
なれば、斯道を研究せんとする女子は成るべく此
方針を採るやうに勧めたいと思ふ。



▲いづれか眞の幸福 (佐治實然氏)
私の生國に伊賀安太郎といふ人がありまして、一時衆議院議員にもなつたことがあります、此人は不幸にして終りを金ふせずして段々貧乏して死んだ、其人の未だ金持で田舎に居つた頃には大百姓でしたから、奉公人が男女取雜で五人も七人も居ります、丁度田舎で夏休みをして居ました日で團子を拵へて下人がシタ、カ食べて居る、其處から一間二間隔つた上の間で主人が蒲團の上に坐つて茶碗に眞白なお粥を入れて向ふに鯛の刺味か何かあつてテリ焼などが付いて御飯を食べて居るところで、其時聞いた話が面白かつた主人が云ふのに下人共はアノ通りまづい團子でもシタ、カに食ひますが、アレで晩に饅頭を拵へますと又澤山食う、ア、云ふ風に働く奴等はどれだけ食うて置いたら腹がへらないだらうと云ふことを何時も念頭に置いて食うて居るやうですがそれでも直にへつてしまふ、私は此の通り粥を一口ぐらゐづゝ入れるのを二杯と、刺味を漸く一切か三切くらゐ、それで何分腹がへらない、膳に向ふときどのくらゐ食つて居つたらへるだらうかと何時も腹のへることを考へる大層な違ひですと云ふ話でありました、其後殆ど三十年或る機會に觸れ或る折に觸れて常に私は其話を思ひ出す之が所謂今日の文明的紳士の生活と田園生活とを代表して遺憾なく現はされて居るところ、人生眞の幸福は此兩者いづれにあるでしやうか(新公論)